
嘘ほどハレヤカナモノハナイ

0 7 1 4

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

嘘ほどハレヤカナモノハナイ

【Nコード】

N4102A

【作者名】

0714

【あらすじ】

密室空間に閉じ込められた人々。共通点はただ1つ。嘘をついたこと。誰が？何のために？外にでる手段は？謎が深まるなか奇妙な時間だけが流れる。

はじめてのトモダチ

『1度だけ人生をやり直せるとしたら、いつに戻りたい？』

『いつでもいいよ。そんなの。』

数学の問題を解く以上に時間をかけて出した答えがそれだった。

授業中になにげなく交わした会話。

今なら即答できる。

『嘘をつく前に戻りたい。』

僕は選択を誤った。

『はい、じゃあ次の文章を西君読んでください。』

『おいっ、西っ、お前だよお前。』

かすかに遠くのほうから声が聞こえてくる。。。。

『起きろって』

隣の席の人が僕を起こしてくれた。（名前は未だに覚えていない。）

1時間目の国語の時間の半分が過ぎていた。

僕はまた1時間目から寝ていたらしい。

隣の人が教科書を指さし、読む場所を教えてくれた。

『お前は選択を誤った…』

騒いでいた教室が静けさを取り戻し、中央の席に座っている西に視線が集まった。

『お前何の本読んでるの?？』

教室がまた騒ぎ出し笑い声に包まれる。

起こしてくれた隣の席の人の声に助けられた。

『あつ、すいません。』

僕は恥ずかしさのあまり読むのをやめてしまった。

『じゃあ西君の変わりに加藤君。続きを読んであげて。』

(あつ、加藤君って言うんだこの人。)

加藤が続きを読み授業は終わりのチャイムを迎えた。

授業が終わり、休み時間になって廊下にしようとした瞬間

『おいっ、西。ちょっと待てよ。』

声をかけてきたのは加藤だった。

『何？』

『さっき助けてやったのに何？はないんじゃないの？』

『あつ、ごめん。けどなんで僕の事助けてくれたの？』

加藤は困った様な表情で西を見つめ、振り返り、外の景色を見ながらこう言った。

『うーん。なんとなくかな。隣の席だし。。。』

『そっかぁ。。。』

沈黙が続き、黙っているのに耐えられなくなった加藤が口を開いた。

『お前は俺の事をどこまで知ってる？』

西は困りながら正直に話した。

『苗字だけ。。。』

西の声をかき消すかのように加藤は言葉を切り出した。

『俺はお前の事結構知ってるよ。』

これが西にとっての初めての友達〔加藤〕との出会いだった。

もう1人のニシテツヤ

西哲也 18歳 性別 ♂ 2度目の高校1年生

不思議だった。

加藤という男が。

加藤は西に対して敬語は使わず、同年代となんら変わりのない感じで接する。

友達に似た存在は今までにもいた。

西は友達だと信じていた。

上辺だけの友達。

西にとって加藤の存在はこれまでのそれとはまるで違っていた。

西は感じた。

これが本当の友達なんだと。

この学校に転校してきて近づいてくる人間はいたが、すぐに離れていった。

西の過去を知ってから

――

『傷害事件』

西哲也 16歳だった。

『聞いた？3組の西って、、』

『人を刺したんだって。。』

『西君って2重人格らしいよ』

『近づかないほうがいいね』

西の居場所はそこにはなくなっていた。

それからだった。

西が自分を閉ざしてしまったのは。

家庭裁判所で精神的に問題があると判断され病院へ検査入院

それから保護観察が決定した。

保護観察が終わってから西は自分の殻に閉じこもったままだった。

親が息子の事を想い、家から少し離れた高校に編入させる事を決めた。

――
西と加藤が出会ってから1ヶ月が過ぎた。

西は気になっていた事を加藤に思い切って聞いてみた

『前から気になってたんだけど、加藤君は僕の起こした事件の事知ってる？』

『知ってるよ』

加藤のはやい返答に西は少し驚き、聞き返した。

『何で？、普通事件の事知ったら避けると思うんだけど。』

『お前は人なんて刺しちゃいない。』

重たい空気が流れ、その場が静寂に包まれる。

『なんでそう思う？』

西の表情が一変し、口調まで変わっていた。

まるで別人のようだった。

加藤は質問に答えず、西に問い詰めた。

今からする質問に答えろ。加藤は間髪いれず西に質問を投げかけた。

西は加藤の質問に戸惑ったが、時間をかけ1つ1つの質問に慎重に答えていった。

『西哲也は高校1年生、16歳の時に人を刺した。』

西は首を立てにふり、ゆっくりとうなずいた。

『今でもあの時の事件を後悔している』

西は首を横にふる

『誰にも言えない隠し事がある』

『ない』 西はこの質問には、はっきりと答えた。

『西、お前の答えには失望した。もう一人の西哲也を見たかったよ』

ドスッ

鈍い物音を聞いたのを最後に西の目の前が真っ暗になった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4102a/>

嘘ほどハレヤカナモノハナイ

2011年1月16日06時30分発行